【共同研究】

青年期の内在的価値志向と生活の質に関する研究

岡 堂 哲 雄・河 野 暁 子

A Study on the Implicit Values and Quality of Life as Assessed by Young People

Tetsuo Okado and Akiko Kono

The purpose of this study is to investigate the implicit values culturally determined, as well as the quality of life felt by young people in Japan.

Questionnaires were administered to 173 university students. They were asked not only to assess implicit values at both the culturally typical level and the individual, but also to check each item of quality of life inventory.

The main results were as folllws;

(1) "Work and experience", one of the individual implicit values, was influential in scores at the quality of life.

(2) There were not any differences between male and female in culturally typical values.

(3) However, there founded some significant differences in individual values. The female subjects were in favor of feminist's view of values, while the male preferred the sex role values.

(4) Young people appeared rather passive and negative at both culturally typical and individual values in Japan than some other countries.

Key words : implicit values, culturally typical and individual. quality of life

I. 問題と目的

1. はじめに

所与の文化における社会化の過程を通じて，子どもはその文化が処方するコミュニケーション能力や的確な相互作用行動の規範やルールを身につける．これらは行動の準拠枠となるが，通常は内在化し気づかれることは少ない．内在的な価値・態度・信念は自分の一部と感じられ，人々の経験・感情・行動に影響を与えている．社会化の初期に獲得される内在的価値基準は認知的案内図となり，ほとんど自動的に活性化する．文化が異なれば，認知的案内図（食事習慣，感情表現，危機対処等）も異なるので，異文化間，異民族間に誤解や衝突が生じるきっかけを与えている．

高速ジェット機網の拡大による交流の増加，パーソナル・コンピュータによるインターネ

ットの展開などによって，21世紀に向けて国際交流はいっそう進展するものと予想される．その担い手は若者である．世界各地の青年がどのような内在的な価値・態度・信念をもっているかについての情報が得られると，誤解を制御することができるようになるし，相互理解がいっそう進展するであろう．

このような理念のもとに，本研究では先ず，わが国の青年に特徴的な内在的価値・態度・信念の解明を目指し，将来の国際比較研究のための助走的報告としたい．

2．内在的な価値・態度・信念の文化差

本研究で使用した価値観に対する質問紙は，既にフィンランド（22名），ギリシャ（14名），スペイン（46名），アメリカ（76名），ユーゴスラビア（98名）で実施されている．各国のデータにおいて，顕著だった傾向は以下の通りである（Krizmanic, M. & Kolesaric, V. 1990）．

フィンランド　安らぎよりも新しい経験を求める．また，自分たちの住んでいる環境を維持し，保護することに強い関心を持っている．

スペイン　普通と異なる人物や思想を危険視せず，人間の争いには理解し合うことが必要だと考え，生活は自分の好きなように暮らして良いと考える．

アメリカ　個人的な目標を，社会的目標より優先させるべきと考え，新しいアイディアを必要とする仕事を好む等，より積極的な姿勢がみられる．また，国家は常になにか特別なものであると考え，愛国心の強いアメリカらしさがうかがえる．

ユーゴスラビア　普通と異なる人物や思想は危険であり，人間の争いには攻撃が必要であり，同じ言葉を話さない人は，本当には理解できないと考える．

3．Quality of Lifeの概念

Quality of Lifeという概念は「生活の質」と訳され，様々な分野で使われている．個人のQuality of Lifeの核となる部分は，人生における満足感の体験から構成されるものである．そのため，多くのファクターから決定される．たとえば，その人の生まれた国，気候，政治や経済の状態，普段気に留めない人生行路にまでいたる．また，それらの相互作用が欠かせなく，たとえ生活水準が上昇したとしても，それが直接Quality of Lifeを高めることにはならないのである．

すなわち，Quality of Lifeとは，生活における様々な分野のQuality of Lifeに対する評価から生じる「楽しい」とか「不快だ」といった総合的な体験である．

そして，この総合的な体験であるQuality of Lifeは，直接的にこれらの体験や主張に主観的な評価を与える．つまり，Quality of Lifeという満足の体験が，個人の価値観に影響し，価値観を決定するということである．これをKrizmanic, et. al.（1990）はFigure 1のようにまとめている．

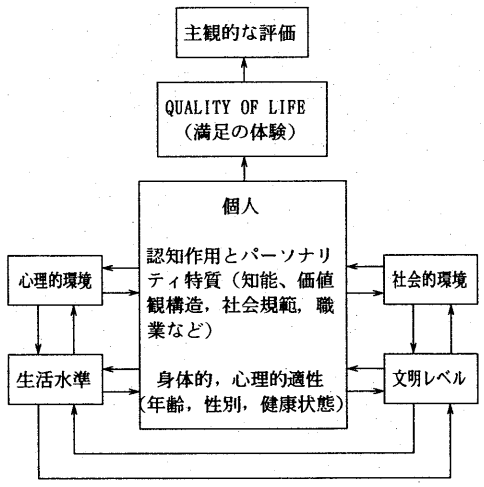

Figure 1　Quality of Life と価値観の関係
(Krizmanic, et. al. (1990) による)

4．本研究の目的

本研究では，第1に青年の内在的価値志向（Implicit Value）と生活の質（Quality of Life）の関連性について精査し，第2に価値志向における男女差を検討するとともに，国際比較により日本青年の特徴を明らかにすることを目的とする．

Ⅱ. 方　　法

1．調査対象者および手続き

本研究の調査は，1994年９月から同年10月の約１ヵ月間に実施された．調査対象者は，東京近郊の大学に通う大学生で，質問紙は大学の授業中に配布したり，数名の協力者を通じて学生へ配布された．回収方法は，依頼者に直接手渡すか，校内の回収ボックスに入れてもらうこととした．有効回答は173名（男子学生84名，女子学生89名）であった．対象者の年齢は18歳から25歳の間に分布し，平均年齢は21.2歳であった．

2．質問紙の構成

質問紙はKrizmanic,et,al.(1990)によって作成され，梶谷（1992）によって翻訳された日本語版を使用した．これは以下の３つの尺度から構成されている．

①自国の大多数の青年が支持する価値観に対する質問48項目（Typical Values：以下ＴＶと記す）．各項目では，価値観についての相反する２つの主張が述べられており，その主張の間を５段階のどれかで選択すること，その際，「自国の大多数の青年が支持すると思われるもの」に注意して回答するように求めた．

②自分自身の価値観に対する質問48項目（Individual Values：以下ＩＶと記す）．各項目では①と同様に，価値観についての相反する２つの主張が述べられており，その主張の間を５段階のどれかで選択すること，その際，「自分自身が支持するもの」に注意して選択するように求めた．

③日常生活における満足度に関する質問21項目（Quality of Life：以下ＱＬと記す）．各項目について，「不満足」から「満足」までの５段階で選択することを求めた．

3．スコアリング

ＴＶ，ＩＶではともに，積極的な価値観とみなされる主張を５点，そこから徐々に４点，３点，２点とし，消極的な価値観とみなされる主張を１点とした．ＱＬでは「満足」を５点，そこから「不満足」にむかって４点，３点，２点とし，「不満足」を１点とした．

なお，本文中で各項目を示すとき，下線部分が相反する価値観の主張で，先ず積極的価値観，「…」に続けて消極的な価値観を記す．

Ⅲ. 結　　果

1．各尺度の構成

質問紙の各項目が，尺度の構成に有効かどうかを検討するために，ＴＶ，ＩＶ，ＱＬの各項目ごとに頻度を算出し，「どちらでもない」と答えたものや無回答が50.0％を超えた項目を除くこととした．

その結果，ＱＬの№6「現在の仕事に，私は満足である…不満足である」，№9「私の信仰（宗教）に私は満足である…不満足である」，№14「私の家族に，私は満足である…不満足である」，№15「私の子どもたちは，私にとって満足の源である…不満足の源である」が除かれた．№6は大学生には不適当な項目であったと思われる．また，№9は日本人には答えにくい質問であったかもしれない．№14，№15は結婚している人に対する質問であったため，解答数が極端に少なかった．

さらに各尺度について，.30を基準に項目分析を行った．基準を満たさない項目は除き，また各項目についてＧＰ分析を行い，上位群，下位群で有意差の認めらなかった項目は除いた．

以上の手続きを経て残った項目について，主因子解バリマックス回転の因子分析を行った．

2．ＴＶの因子分析

ＴＶでは３因子抽出された（Table１参照）．第１因子では，「責任は，物事を行うときはいつでも必要とされる…なんらかの特別な場合にのみ必要とされる」，「自然環境は，私たちの手で保ち，守るものである…変化させ，私たちの必要に合致させるものである」，「人間の争いには，わかり合うことが必要である…攻撃することが必要である」などが高

Table 1　Typical Values因子構造

No.	項　　目	第1因子	第2因子	第3因子
9.	年配の人々は，若い人々と〔同年代の人々と〕生活を分かち合うべきだ	.44		
10.	責任は，物事を行うときはいつでも〔なんらかの特別な機会にのみ〕必要とされる	.73		
16.	自然環境は，私たちの手で保ち，守る〔変化させ，私たちの必要に合致させる〕ものである	.60		
22.	人間の争いには，わかりあうこと〔攻撃すること〕が必要である	.54		
27.	多くの人は，人間関係の大半は協力〔競争〕だと思っている	.31		
28.	毎日の仕事のなかで，大多数の人々は解決法を自分で探していく〔解決方法が前もって用意されている〕仕事をより好む	.50		
30.	生れつきの体臭は個性的な香りとして構わないほうがいい〔何とかして消したほうがいい〕	.49		
36.	人々は彼らの人生は彼らの努力によって〔運命によって〕決定されることを知るべきである	.50		
38.	私にとって，最大の刺激は精神的なもの〔物質的なもの〕である	.39		
42.	人生において，1つ確かなのは『変化』である．その変化は主に挑戦〔脅威〕のために生じる	.46		
48.	大多数の人は，人はすべての人〔自分と同格の人〕に対して礼儀正しくするべきだと考えている	.42		
7.	私は新しいアイディアを活用できる〔過去に確立された方法で行える〕仕事を好む		.38	
11.	結婚したら，全ての重要な決定は，夫婦2人の同意によって〔夫によって〕なされなければならない		.47	
12.	大多数の人々は，自分の能力をすべて発揮できる〔より高い地位に昇進できる〕ような仕事がすきであろう		.36	
13.	友情は，気心の合う人〔同じ生まれの人〕の間にのみ成立することができる		.41	
14.	健康問題は，私たち自身の行い〔神の意志〕のために起こる		.41	
31.	多くの人は，女性は望むどんな専門職にも従事する〔家にいて子どもを養育する〕べきであると考えている		.48	
34.	若者は彼ら自身の意見をもつべき〔年長者のすることに従うべき〕である		.68	
35.	私は，個人的目標は社会的目標より優先するべきだ〔常に社会的目標のあとにするべきだ〕と信じている		.62	
40.	家族のなかで，父親はほかの家族の意見を聞くべきだ〔すべてのことを決定するべきだ〕		.41	
45.	行為の基準は時代にそって変わる〔常に伝統によって規定されている〕		.47	
1.	私は新しい経験〔やすらぎと平穏〕を強く求めている			.34
5.	人々は行動とそのやり方〔生まれと所属集団〕で，その人がどういう人なのか判断する			.34
8.	大多数の人々は，自分の人生が自分の思い通りになる〔過去によって決定されている〕と信じている			.48
17.	ある人は上役が正しくないとき，その人はそのことを上役に告げる〔沈黙を保つ〕べきである			.44
18.	談話しているとき，身体的接触，さわることを自由に行う〔絶対にしないよにする〕べきである			.37
20.	大多数の人々は，親たちは子どもが言うことをきくこと（従順さ）を軽視する〔重視する〕べきだと考えている			.34
21.	ふつうでない人物は思想は，必ずしも危険ではなくおおめに見るべきである〔危険であり，大目に見るべきではない〕ことがよく知られている			.49
24.	同じ言語を話さない人同士は，それでもなお完全にわかりあえる〔本当にわかりあえない〕			.32
25.	大多数の人々は，みため，服装，暮らしぶりは自分の好きなように〔周囲の人と同じように〕するべきだ			.34
29.	人は，他人に対して感情をあらわにしてよいと思う〔いけないと思う〕			.50
33.	大多数の人にとって独立して〔チームのなかで〕働けることが大変重要である			.31
39.	私はいつも感情をあらわにする〔感情を極力おさえる〕人を好む			.43
	寄与率	15.7%	9.7%	5.8%

い負荷量を示した．これは人間関係や人の周りの環境についての価値観を表していると考えられるため，この因子を「対人関係・環境因子」と命名した．

第2因子では，「若者は彼ら自身の意見を持つべきである…年長者のすることに従うべきである」，「多くの人は，女性は望むどんな専門職にも従事するべきである…家にいて子どもを養育するべきであると考えている」，「結婚したら，全ての重要な決定は，夫婦二人の同意によってなされなければならない…夫によってなされなければならない」などが高い負荷量を示した．これは慣習や特別役割についての価値観を表していると考えられるため，「慣習・性役割因子」と命名した．

第3因子では，「人は，他人に対して感情をあらわにしてよいと思う…いけないと思う」，「ふつうでない人物や思想は，必ずしも危険ではなく大目に見るべきである…危険であり，大目に見るべきではないことがよく知られている」，「ある人の上役が正しくないとき，その人はそのことを上役に告げるべきである…沈黙を保つべきである」などが高い負荷量を示した．これは人とのコミュニケーションのとり方や，集団についての価値観を表していると考えられるため，「コミュニケーション・集団因子」と命名した．

3．ＩＶの因子分析

ＩＶでは4因子抽出された（Table 2参照）．第1因子では，「毎日の仕事のなかで，大多数の人々は解決法を自分で探していく仕事をより好む…解決法が前もって用意されている仕事をより好む」，「私は新しいアイディアを活用できる仕事を好む…過去に確立された方法で行える仕事を好む」，「私は新しい経験を強く求めている…やすらぎと平穏を強く求めている」などが高い負荷量を示した．これは仕事や体験についての価値観を表していると考えられるため，「仕事・体験因子」と命名した．

第2因子では，「健康問題は，私たち自身の行いから生じる…神の意志で起こる」，「若者は彼ら自身の意見を持つべきである…年長者のすることに従うべきである」，「人々は彼らの人生は彼らの努力によって決定される…運命によって決定されることを知るべきである」などが高い負荷量を示した．これは責任についての価値観を表していると考えられるため，「責任因子」と命名した．

第3因子では，「ニンニクや玉ねぎといった薬味の入った料理を食べた人は，いかなる人でもいつものようにつきあうべきである…他の人と合わないようにするべきである」，「生れつきの体臭は個性的な香として構わないほうがいい…なんとかして消したほうがいい」，「個人の清潔さはそれなりに重要だ…絶対的に重要だ」などが高い負荷量を示した．これは清潔さや周囲に対する寛容さについての価値観を表していると考えられるため，「清潔・寛容因子」と命名した．

第4因子では，「人は，他人に対して感情をあらわにしてよいと思う…いけないと思う」，「多くの人は，人間関係の大半は協力だと思っている…競争だと思っている」，「同じ言語を話さない人同士は，それでもなお完全にわかりあえる…本当にはわかりあえない」などが高い負荷量を示した．これは対人関係においての価値観を表していると考えられるため，「対人関係因子」と命名した．

4．ＱＬの因子分析

ＱＬでは3因子抽出された（Table 3参照）．第1因子では，「これまでの目標達成や希望の実現をふりかえって，私は満足と思う…不満足と思う」，「今日までの生活に，私は満足と思う…不満足と思う」，「生活がこれまでと同じように続くとしたら，私はそれに満足だと思う…不満足だと思う」などが高い負荷量を示した．これは生活全般についての満足度を表していると考えられるため，「生活因子」と命名した．

第2因子では，「私の社会的地位に，私は満足である…不満足である」，「私の住居に，私は満足である…不満足である」，「私が住む社会環境，権利と自由に，私は満足である

…不満足である」などが高い負荷量を示した．これは環境や社会的地位についての満足度を表していると考えられるため，「環境・地位因子」と命名した．

第3因子では，「友人・同僚・隣人などの関係に，私は満足である…不満足である」，「私が教育を受けた学校に，私は満足である…不満足である」などが高い負荷量を示した．これは人間関係や学校についての満足度を表していると考えられるため，「人間関係・学校因子」と命名した．

5．各尺度の信頼性

各尺度の内的整合性を確認するために，クロンバックのα係数を算出したところ，TV＝.83，IV＝.72，QL＝.89であった．IVのα係数がやや低かったが，TV，QLはともに高い値を示したため，尺度の内的整合性は十分保たれているとみなすことにした．

Table 2　Individual Values因子構造

No.	項目	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子
1.	私は新しい経験〔やすらぎと平穏〕を強く求めている	.64			
7.	私は新しいアイデアを活用できる〔過去に確立された方法で行える〕仕事を好む	.65			
8.	大多数の人々は，自分の人生が自分の思い通りになる〔過去によって決定されている〕と信じている	.35			
15.	人々がある人物の行為について満足できないとき，彼らはその人にそれを話す〔話さないでおく〕ことをより好む	.34			
28.	毎日の仕事のなかで，大多数の人々は解決法を自分で探していく〔解決方法が前もって用意されている〕仕事をより好む	.67			
5.	人々は行動とそのやり方〔生まれと所属集団〕で，その人がどういう人なのか判断する		.32		
11.	結婚したら，全ての重要な決定は，夫婦2人の同意によって〔夫によって〕なされなければならない		.34		
14.	健康問題は，私たち自身の行い〔神の意志〕のために起こる		.49		
34.	若者は彼ら自身の意見をもつべき〔年長者のすることに従うべき〕である		.40		
36.	人々は彼らの人生は彼らの努力によって〔運命によって〕決定されることを知るべきである		.46		
47.	自身をだます人は，どんな人でも哀れに思われるべきだ〔十分に価値がある〕		.33		
48.	大多数の人は，人はすべての人〔自分と同格の人〕に対して礼儀正しくするべきだと考えている		.42		
3.	個人の清潔さはそれなりに〔絶対的に〕重要だ			.46	
6.	ニンニクやたまねぎといった薬味の入った料理を食べた人は，いかなる人でもいつものようにつきあう〔他の人と合わないようにする〕べきである			.60	
21.	ふつうでない人物や思想は，必ずしも危険ではなく多めに見るべきである〔危険であり，大目に見るべきではない〕ことがよく知られている			.42	
30.	生まれつきの体臭は個性的な香りとして構わないほうがいい〔何とかして消したほうがいい〕			.63	
9.	年配の人々は，若い人々と〔同年代の人々と〕生活を分かち合うべきだ				.31
22.	人間の争いには，わかりあうこと〔攻撃すること〕が必要である				.37
24.	同じ言語を話さない人同士は，それでもなお完全にわかりあえる〔本当にわかりあえない〕				.37
27.	多くの人は，人間関係の大半は協力〔競争〕だと思っている．				.43
29.	人は，他人に対して感情をあらわにしてよいと思う〔いけないと思う〕				.48
39.	私はいつも感情をあらわにする〔感情を極力おさえる〕人を好む				.38
	寄与率	8.3%	6.5%	5.6%	4.8%

Table 3　Quality of Life因子構造

No.	項目	第1因子	第2因子	第3因子
11.	余暇の過ごし方に，私は満足〔不満足〕である	.52		
16.	今日までの生活に，私は満足〔不満足〕だと思う	.66		
17.	この1年間の生活に，私は満足〔不満足〕だと思う	.66		
18.	これまでの目標達成や希望の実現をふりかえって，私は満足〔不満足〕と思う	.67		
19.	私は，現在までに実現できなかったことすべてを，将来もちろん実現できる〔とても実現できない〕と思う	.34		
20.	生活がこれまでと同じように続くとしたら，私はそれに不満足〔満足〕だと思う	.55		
21.	友人・同僚・隣人・知人の生活と比べると，私自身の生活は，一般にかなり良い〔かなり悪い〕と思う	.51		
1.	私の（生まれ育った）家族に，私は満足〔不満足〕である		.33	
7.	私の社会的地位に，私は満足〔不満足〕である		.70	
8.	私が住む社会環境，権利と自由に，私は満足〔不満足〕である		.46	
10.	私の健康状態に，私は満足〔不満足〕である		.31	
12.	私の世間的な地位に，私は満足〔不満足〕である		.69	
13.	私の住居に，私は満足〔不満足〕である		.49	
2.	愛情豊かな人間関係に，私は満足〔不満足〕である			.37
3.	私の性生活に，私は満足〔不満足〕である			.40
4.	友人・同僚・隣人などとの関係に，私は満足〔不満足〕である			.67
5.	私が教育を受けた学校に，私は満足〔不満足〕である			.54
	寄与率	30.0%	9.1%	8.5%

Table 4　各尺度の関係

	TV				IV				
	全体	対人関係・環境	習慣・性役割	コミュニケーション・集団	全体	仕事・体験	責任	清潔・寛容	対人関係
QL全体	.15*	.17**	.13*	.04	.13*	.20**	.04	-.07	.03
生活	05	.07	.02	-.04	.13	.25***	.04	-.05	-.05
環境・地位	.17	.17**	.17**	.04	.03	.05	.04	-.13	.05
人間関係・学校	.20	.18**	.09	.16*	.17	.17*	-.00	.06	.09

*** P<.001　** P<.01　* P<.05

6．各尺度の相関

自国の青年において一般的と思われる価値観と，実際の価値観およびQuality of Lifeの関係を検討するために，TV，IV，QLの全体と各因子ごとにピアソンの相関係数を算出した（Table 4参照），その結果，ほとんどの尺度間，因子間において相関関係は認められなかったが，IVにおける「仕事・体験因子」とQL全体に弱い正の相関関係（r＝.20，p<.01），またQLにおける「生活因子」との間に弱い正の相関関係（r＝.25，p<.001）が認められた．

7．各尺度の男女差

自国の青年において一般的と思われる価値観と，実際の価値観およびQuality of Lifeにおける男女差を検討するために，各尺度ごとにt検定を行った（Table 5参照）．その結果，TVにおいては男女の差が認められなかったが，IVでは男女に有意差（t＝3.00，p<.01)が，QLでは有意傾向（t＝1.77，

Table 5　各尺度の男女差

	N	MEAM	SD	t値
TV				
M	84	105.70	14.82	0.30
F	89	105.04	14.02	
IV				
M	82	131.04	13.24	3.00**
F	89	137.02	10.29	
QL				
M	81	57.49	9.33	1.77†
F	88	59.81	7.85	

**P<.01　†P<.1

p<.1）がそれぞれ認められた．ＩＶでは女子の方が男子よりも積極的な価値志向を示しており，ＱＬでは女子の方が男子よりも満足度が高い傾向がみられた．

さらに男女差の傾向を詳しく調べるために，ＩＶ，ＱＬにおいて各項目ごとに，ｔ検定を行った．

ＩＶで男女間に有意差がみられた項目（ｔ＝2.02から3.65，いずれもｐ<.05)をFigure 2に示す．ＩＶでは，「公的な交通機関（バス，電車，地下鉄など）を利用するときは，私は他人が自分に寄りかかることが気にならない…我慢できない」，「談話しているとき，身体的接触，触ることを自由に行うべきである…絶対にしないようにするべきである」の２項目で，男子の方が女子よりも積極的な価値志向を示した．一方，女子が男子よりも積極的な価値志向を示したのは，「責任は物事を行うときはいつでも必要とされる…なんらかの特別な機会にのみ必要とされる」，「結婚したら，すべての重要な決定は，夫婦二人の同意によってなされなければならない…夫によってなされなければならない」，「人間の争いにはわかり合うことが必要である…攻撃することが必要である」，「女性は望むどんな専門職にも従事するべきである…家にいて子どもを養育するべきであると考えている」，「国家は常になにか特別なものである…どれも似たり寄ったりである」，「私はいつも感情をあらわにする人を好む…感情を極力おさえる人を好む」，「家族の中で，父親は他の家族の意見を聞くべきだ…すべてのことを決定するべきだ」，「人生において，一つ確かなのは『変化』である．その変化は主に挑戦…脅威のために生じる」，「私は，人は全ての人に対して…自分と同格の人に対して礼儀正しくするべきだと考えている」であった．

ＱＬで男女間に有意差がみられた項目（ｔ＝1.99から2.53，いずれもｐ<.05)をFigure 3に示す．ＱＬでは「性生活」，「教育を受けた学校」，「余暇の過ごし方」，「住居」，「今日までの生活」，「この１年間の生活」において男女差が認められた．「住居」では男子の方が女子よりも満足度が高かった．しかし，その他の項目は，女子の方が男子よりも，満足度が高かった．

8．諸外国との比較

本研究の事前に得られたデータは，先の５ヵ国の調査結果をプロフィールにまとめたもので，各国の詳しい数値までは把握しきれなかった．したがって，本研究で得られた日本人青年のデータと，統計的な差は検定できなかった．ここでは，日本人青年のデータを他５ヵ国との同一プロフィールに載せたとき，他国と比べて顕著であった日本の青年の価値観に対する傾向を述べる．

ＴＶで，日本の青年が他の５ヵ国に比べてより積極的な価値志向を支持した項目は，「健康問題は私たち自身の行いから生じる…神の意志で起こる」であった．一方，他の５ヵ国に比べてより消極的な価値志向を支持した項目は以下の通りであった．「新しい経験…安らぎと平穏を強く求めている」，「責任は物事を行うときはいつでも必要とされる…なんらかの特別な機会にのみ必要とされる」，「親たちは子どもの従順さを軽視するべきだ…重視するべきだと考えている」，「毎日の仕事の中で解決法を自分で探していく仕事をより好む…解決法が前もって用意されている仕事をより好む」，「個人の清潔さは，それ

なりに必要だ…絶対的に必要だ」，「生れつきの体臭は，個性的な香として構わない方がいい…なんとかして消した方がいい」，「人は他人に対して感情をあらわにして良いと思う…いけないと思う」，「上役が正しくないとき，そのことを上役に告げるべきである…沈黙を保つべきである」，「普通でない人物や思想は，必ずしも危険ではなく大目に見るべきである…危険であり，大目に見るべきではない」，「同じ言語を話さない人同士は，それでもなお完全にわかり合える…本当にはわかり合えない」，「女性は望むどんな専門職にも従事するべきである…家にいて子どもを養育するべきである」，「公的な交通機関を利用するとき，他人が自分に寄りかかる事が気にならない…我慢できない」．

また，他の5ヵ国の平均と大きくずれていた項目は，「自分の能力をすべて発揮できるような仕事が…より高い地位に昇進できるような仕事が好きである」，「人は他人に対して感情をあらわにして良いと思う…いけないと思う」で，日本の青年はいずれも消極的な

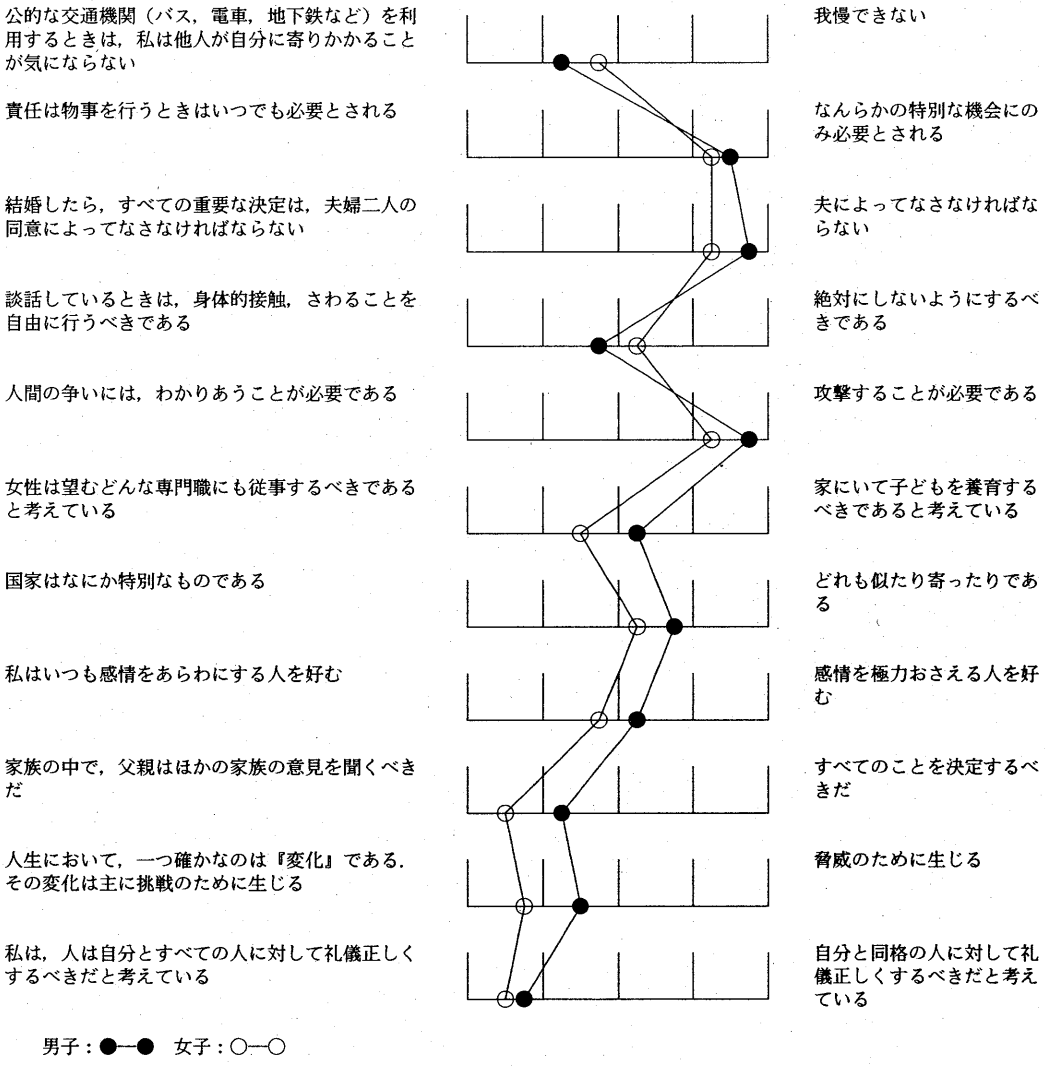

Figure 2　Individual Valuesの男女差

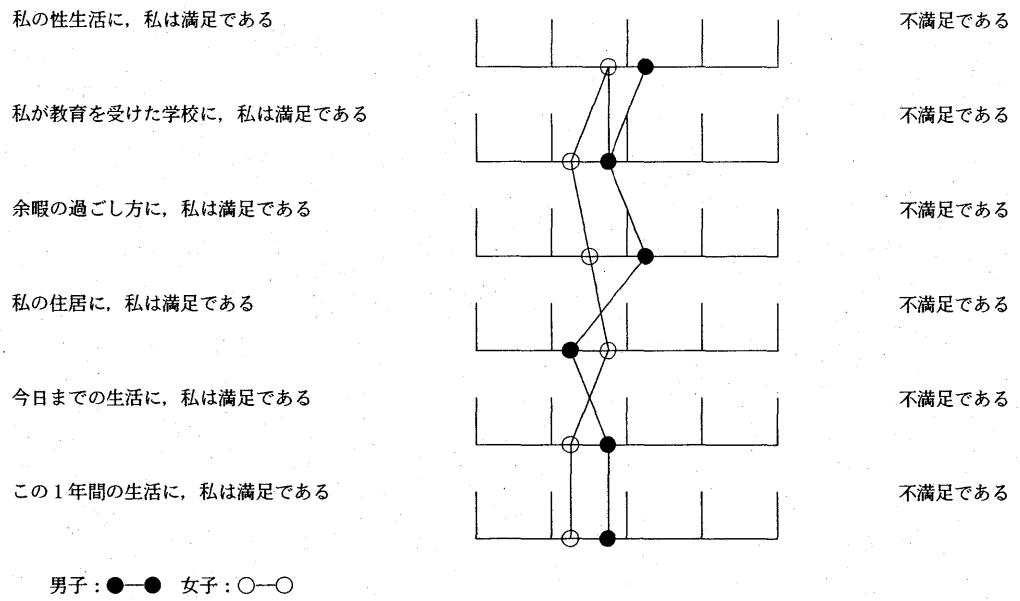

Figure 3　Quality of Lifeの男女差

価値志向を支持していた．

ＩＶで，日本の青年が他の５ヵ国よりも積極的な価値志向を示した項目は，「友情は気心の合う人…同じ生まれの人の間にのみ成立することができる」，「健康問題は私たち自身の行いから生じる…神の意志で起こる」，「行為の基準は時代にそって変わる…常に伝統によって規定されている」であった．

一方，他の５ヵ国に比べて，より消極的な価値志向を支持した項目は以下の通りであった．「個人の清潔さは，それなりに必要だ…絶対的に必要だ」，「親たちは子どもの従順さを軽視するべきだ…重視するべきだと考えている」，「私は新しい経験…安らぎと平穏を強く求めている」，「人は他人に対して感情をあらわにして良いと思う…いけないと思う」，「人は貢献度に応じて…すべて等しく報いられるべきだ」，「女性は望むどんな専門職にも従事するべきである…家にいて子どもを養育するべきである」．

また，他の５ヵ国の平均と大きくずれていた項目は，「私にとって，最大の刺激は精神的なもの…物質的なものである」で，日本の青年は「精神的なもの」を支持していた．また，「私はいつも，感情をあらわにする人を好む…感情を極力おさえる人を好む」も他の５ヵ国の平均と大きくずれており，「感情を極力おさえる」を支持していた．

Ⅳ．考　　察

１．Quality of Lifeと価値観の関係

Quality of Lifeと自国の青年において一般的だと思われる価値観との間には，相関関係は認められなかった．しかし，被験者自身が持つ「仕事・体験」についての価値観とは正の相関関係が認められた．特に，Quality of Lifeの「生活」に関する満足度と正の相関関係を示しており，これまでの生活に満足している場合，仕事や体験において，より積極的で自主的な価値観を示す傾向があるといえる．このことはKrizmanic, et. al.(1990)の主張する“Quality of Lifeの高低が，人の価値観に影響を与える”を，部分的ではあるが証明しているといえるだろう．

しかし，いずれにしても説明率は６％と低いため，Quality of Lifeが人の価値観に

与える影響を過大視してはならないだろう．

2．価値観の男女差

自国の青年が大多数支持すると思われる価値観には，男女で差が認められなかった．しかし，実際に自分が支持する価値観には，男女で差が認められ，女子の方が男子よりも積極的な価値観を持っていた．

項目ごとで，男子が女子よりも積極的な価値志向を示したのは，「公的な交通機関（バス，電車，地下鉄など）を利用するときは，私は他人が自分に寄りかかることが気にならない…我慢できない」，「談話しているとき，身体的接触，触ることを自由に行うべきである…絶対にしないようにするべきである」の2項目であったが，男子の方が身体接触を厭わないといえよう．

一方，女子の方が男子よりも積極的価値志向を示した項目は多数あった．特徴的なのは，「結婚したら，すべての重要な決定は，夫婦二人の同意によってなされなければならない…夫によってなされなければならない」，「女性は望むどんな専門職にも従事するべきである…家にいて子どもを養育するべきであうると考えている」，「家族の中で，父親は他の家族の意見を聞くべきだ…すべてのことを決定するべきだ」など，性役割に関して積極的な価値志向を支持していることである．現在の日本の女子大学生が，女性は男性と対等であるべきという価値観を強く支持しているのに対し，男子学生の方には，“男は仕事，女は家庭”というような日本の伝統的な性役割観が残っているといえるだろう．

また，責任感，礼儀正さなどで，女子の方が積極的な価値観を強く支持していた．さらに，男子が感情表現を極力おさえる人を好むのに対して，女子が感情をあらわにする人を好むことを合わせて考えると，価値観上よく言われる“やさしい男性”“強い女性”像が浮かぶようである．

3．Quality of Lifeの男女差

Quality of Lifeでは，「性生活」，「教育を受けた学校」，「余暇の過ごし方」，「住居」，「今日までの生活」，「この1年間の生活」において男女差が認められた．「住居」では男子の方が女子よりも満足度が高かった．大学生の場合，女子は自宅から通学することが多く，家族と暮らすことで，男子と違って不自由さを感じることが考えられる．

しかし，「住居」以外の項目は，女子の方が男子よりも，満足度が高かった．特に，「性生活」，「余暇の過ごし方」については，女子が満足の傾向にあるのに対して，男子は不満の傾向を示しているのが特徴的である．全体的には，女子の方が男子よりも，生活が充実し満足している傾向がみられた．

4．Typical Valuesの諸外国との比較

他の5ヵ国すべての積極的な価値観を支持している項目においても，消極的な価値観を支持していた項目が多かったことが，日本のTypical Valuesの特徴といえよう，また，たとえ積極的な価値観を支持するとしても，その強度は他国に比べて弱い．唯一他のどの国よりも，積極的な価値観を支持したのが，「健康問題は私たち自身の行いから生じる…神の意志で起こる」であった．これは，日本と他の5ヵ国とでは宗教の捉え方が異なり，「神の意志」というものの存在が考えにくいためではないだろうか．

消極的な価値志向からは，まさにステレオタイプ的な日本の青年像が浮かび上がる．つまり，未知なるものへは警戒心を持ち，感情はあまり外に出さず，閉鎖的である．チャレンジ心に乏しく，仕事はルーティングワークを好む．清潔さを絶対視し，性別役割が根強く残っている．以上のことは，世間の批判の対象となるような，無気力でことなかれ主義的な青年像とだぶってくる．これが日本の青年が認める，典型的な日本人青年像なのであるが，あまり魅力的には感じられず，非常に寂しい印象を受ける．

5．Individual Valuesの諸外国との比較

典型的な日本人青年像は，非常に消極的な価値観を支持するものであったが，実際に大学生が支持する価値観はどうであろう．

Individual Valuesで，日本の青年が他の5ヵ国よりも積極的な価値志向を示した項目は，「友情は気心の合う人…同じ生まれの人の間にのみ成立することができる」，「健康問題は私たち自身の行いから生じる…神の意志で起こる」，「行為の基準は時代にそって変わる…常に伝統によって規定されている」であった．身分や人種，出身などによる差別を強く否定しているといえる．このことは，他の5ヵ国との文化的，地理的，歴史的な違いを物語っているように思える．また，Typical Valuesと同様に，健康問題が私たち自身の行いによって起こると考えるのは，宗教に対する考え方（単なる習慣や現世利益のためなど）が，他国と異なるためであろう．行為の基準が時代にそって変わると捉えているところは，少し前に“新人類”と呼ばれていた世代らしさの反映かもしれない．このような価値観によって，先のステレオタイプ的な日本人青年像が，いずれ変化していくとを期待したい．

一方，他の5ヵ国に比べて，より積極的な価値志向を支持した項目は，「個人の清潔さは，それなりに必要だ…絶対的に必要だ」，「親たちは子どもの従順さを軽視するべきだ…重視するべきだと考えている」，「私は新しい経験…安らぎと平穏を強く求めている」，「人は他人に対して感情をあらわにして良いと思う…いけないと思う」，「人は貢献度に応じて…すべて等しく報いられるべきだ」，「女性は望むどんな専門職にも従事するべきである…家にいて子どもを養育するべきである」であった．

清潔感に関して，他の5ヵ国がそれなりに大切と考えているのに対して，日本では絶対的に重要だと考えられている．これは，最近日本の青年にみられる体臭コンプレックスや，食事ごとの歯磨きなど，過剰なまでの清潔コンプレックス現象の根底にある価値観であろう．数々のデオドラント商品がヒットしていることからもわかるように，日本人青年にとって，根強いものと思われる．

また，「親たちは子どもの従順さを重視する」，「女性は家にいて子どもを養育するべき」など，非常に伝統的，保守的な価値観が残っていることも示唆された．とくに，性別役割に関しては，Typical Valuesと同様に，伝統的な価値観が根強く残っているようである．

さらに，「人は他人に対して感情をあらわにしてはいけない」などは，非常に日本人らしい価値観といえよう．能などに代表されるように，文化的な背景を持つものなのかもしれない．また，「人はすべて等しく報いられるべき」という価値観も強く支持されたが，終身雇用制度が崩れつつある現代では，このような価値観は変化していくものなのかもしれない．

他の5ヵ国の平均と大きくずれていたのは，「私にとって，最大の刺激は精神的なもの…物質的なものである」，「私はいつも，感情をあらわにする人を好む…感情を極力おさえる人を好む」であった．

日本の青年が精神的なものを刺激的と感じる傾向は，最近の新興宗教ブームなどにみてとれよう．また，日本では物資が不足することはまずなく，欲しいものは大抵手に入ってしまう．このような現状を考えると，日本の青年は，もはや物質的なものに刺激を感じないのかもしれない．

また，「感情をおさえる人を好む」傾向は，先に述べた日本人の文化的背景が推測されるとともに，日本人のシャイの特性を表しているといえるだろう．

6．本研究の問題点と今後の課題

本研究は具体的な価値観についての研究であった．価値観は時代とともに確実に変化している．価値観の多様化は，その国特有の文化をも崩壊させる結果を招くとも言われている．しかし，価値の多様化や違いを理由に，自分と異なるものを受け入れないとしたら，視野は狭まるばかりである．異なる価値観への相互理解を深めるためにも，青年の価値観について今後も探求していくことが必要で

あろう.

今回は大学生のみを対象に調査を行ったが，同じ青年期でも大学生以外の人はどうなのか，また，異なった世代ではどうなるのかなどの，対象を広げた横断的研究が課題として残される．さらに，今青年期だった人が歳をとったとき，価値観がどのように変化するのかなどの，縦断的研究も望まれるだろう.

今回の研究で比較対象となった国は，いずれも欧米諸国であった．今後，アジアやアフリカ，南米などの異なった文化を持つ国々との比較に期待したい.

V. 結　　論

Quality of Lifeの価値観に与える影響としては，被験者自身が持つ「仕事・体験」についての価値観と正の相関関係が認められた．特に，Quality of Lifeの「生活」に関する満足度と正の相関関係を示しており，これまでの生活に満足している場合，仕事や体験において，より積極的で自主的な価値観を示す傾向があるといえる.Krizmanic, et, al.(1990)の主張する“Quality of Lifeの高低が，人の価値観に影響を与える”ということが，部分的であるが認められた.

Typical Valuesでは，男女で違いはなかったが，Individual Valuesでは男女に差がみられ，男子は性別役割を支持する価値観を，女子は男女が対等で，女性も仕事を持つような価値観を支持する傾向であった.

また諸外国との比較では，日本の青年は様々な分野において，積極的な価値観を支持してはいるが，それは絶対的な支持ではなく，やや積極的な価値観を持っているという傾向であった．とくに，Typical Valuesでは，ステレオタイプ的な日本人青年像（感情を外に出さない，閉鎖的，チャレンジ心が乏しい，性別役割を支持するなど）が浮かんできた.

Individual Valuesでも，諸外国に比べると，消極的な価値観を支持しているのが特徴であった.

付　記：この研究は，1989年７月アムステルダムで開かれた第１回欧州心理学会議において，岡堂が当時ユーゴスラビア（現，クロアチア）ザグレブ大学のクリズマニック教授に出会い，青年の内在的価値志向に関する国際比較研究を約したときに始まる．その後，ベルリンの壁の崩壊に引き続くユーゴスラビアの解体と内戦の故に，1992年以後今日まで同教授からの音信は途絶えている.

本報告は，文教大学大学院共同研究費（1993年度，1994年度）によって支援された研究成果の一部である.

文　　献

林　久乃（1995）　青年期における価値観に関する一考察　文教大学人間科学部卒業論文（未刊行）

Jourard, S. M. (1966) An exploratory study of body-accessibility. British J. Soc. Clin. Psychol. 114, 135-135.

Kaplan, M. R. (1985) Quality of life measurament. In “P. Karoly (Ed.) Measurement Strategies in health psychology” pp. 115-146 New York : J. Wiley & Sons.

Krizmanic, M. & Kolesaric, V. (1989). Quality of life : An attempt at conceptualization. presented at the 1st Congress of European Psychological Association. Amsterdam.

Krizmanic, M. & Kolesaric, V. (1990). The meaning and importance of culturally determined implicit values in the internationalization of education. presented at the International Seminar University Today, Dubtonic.

岡堂哲雄（1978）　青年期の心理　新曜社